

かは國のとみくさになぞらへて、豊年を祈る、九重の空の上には、四方拜小朝拜など政事繁けれ
 ど、地下にさたく沙汰し知べきわざにも侍らじなれば、只見えわたる四方山の、いつとなくう
 ちかすみて、いひまらず長閑なる景氣、けさあたゝむるかんの氷も、かつ隙見する池の鏡餅をさ
 へとりよせて、ちとせのかげもくまなき家の内の心祝儀ども、蓬萊の臺など置て、不死の藥の酒
 くむやうす、ゆるりくはんすととゝをして、おほぶくいほふていたらく、外には、まめかざり、内に
 は年徳、わかゑびすをむかへ、庭には庭かまとたき、ふくわらをまきたへ、うないやひすましら
 の、ほうびきや何やといひ遊び、庄屋の一番ふもはま弓をいたへありき、まやうどの、おこうは、は
 ごいたもてはねまはり給ふありさま、物まふといふ禮者の顔も、御出のよしまふといらふ下部
 がつらも、よひの年の寒さいそがしさをわすれはてつゝ、わかやぎあへる氣色など、詞のえん花
 やかに、ひと、せの始、卷頭の心なれば、たけたかくすなほにあらまほし。